【緑地を楽しむ本】

シロツメクサはともだち

鈴木　純/著　　ブロンズ新社

「いつもの道を歩いていたら、だれかによばれたような気がして」・・・「おーい」とよんでいたのはシロツメクサでした。「なーんだ、シロツメクサか」となります。

が・・・こんなにシロツメクサをジックリと見つめたことはなかったなー、となることうけあいです。

小さな花のかたまりとなっている、あのまーるくて白い「花」を分解。２０～１００個の小さな花のかたまりで、さらに茶色くしおれたものを分解すると、中からはマメのサヤが出てきます。マメ科だったのですね。

茶色になった「花」は、かたまりのまま、まるごと落っこちてそこから葉っぱが出てくるとか。

今度見つけたら「なーんだ」ではなくなります。

（遠藤）